

きなおもちやの　とら　だな―　ね―さんわ」　「あ  
しのおともだち」　「げた　でしよ」

「あてられました」

「ぼち　にわ　おかし　でもやる」

半太と小人

むかし　くある所に　靴屋の半太とゆ―　正直者  
が　ありましたとき。　所が　ある時　商賣で大變な  
損をして　丸つきり家が貧乏になつてしまつたので  
す。　夫で家にわ、　何にもない様になりましたが　夫

でもまーいー事にわ一足の靴が造れる位の革が  
残って居ました。

或晩のことでしたか　半太わ　其革を截って置き  
まして　明朝になつてから　夫で靴を拵える積で  
寢て仕舞いました。

さて明朝になつて　半太わ　疾ーから起きて　そ  
こいら片附けて　御飯もすまして　さーこれから  
仕事に懸ろーと思つて　仕事場へ行つて見ますと  
不思議な事にわ　チェーンと　靴が一足出来て居る  
のです。『ばてな　妙なことも　あればあるものだ』

と思つて、尙手に取つてよくく見ますと 中々立  
派に出来て居て とても人間の手で 出来たものと  
見ええない。

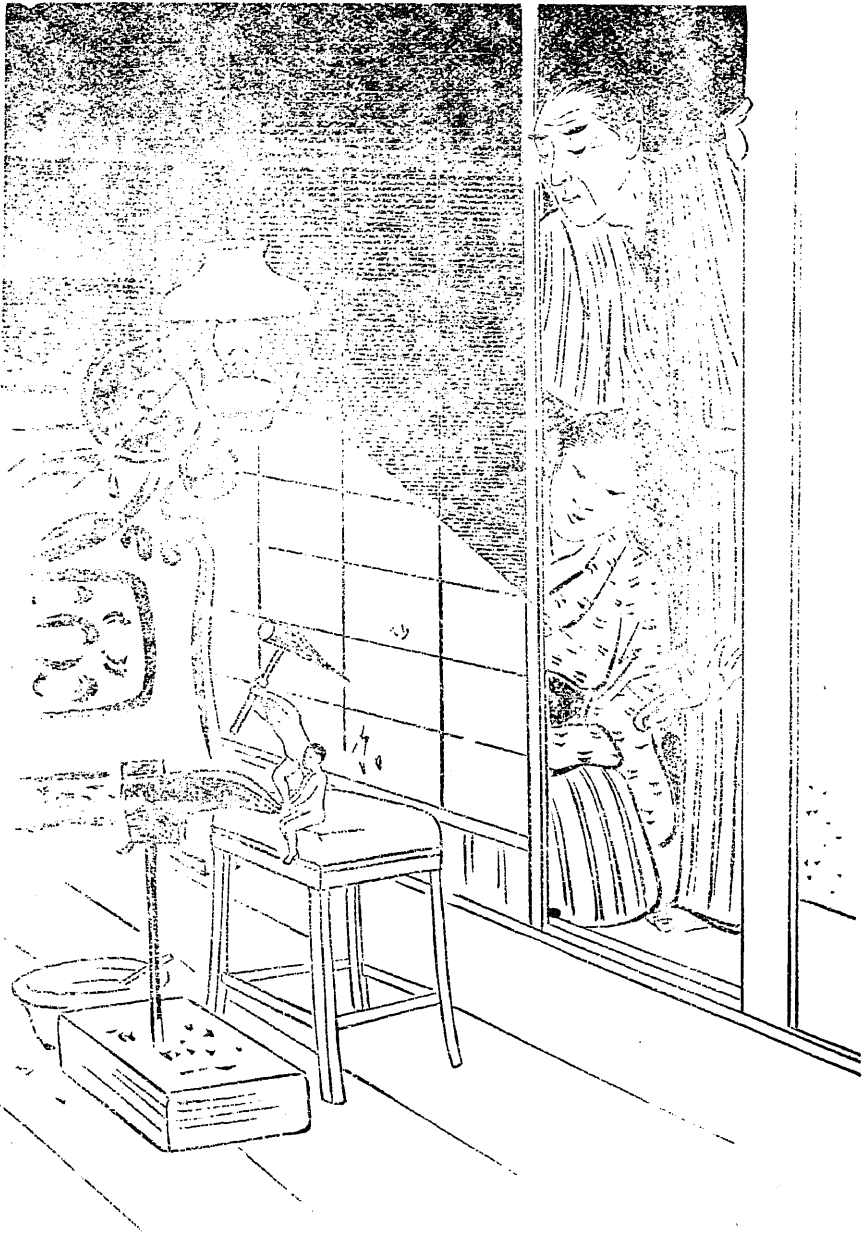
所え 買人が一人 やつて來まして 其靴を見て  
これわ どれも甘く 出来て居るとゆゝので 早速  
高いお金で買つて行きました。半太わ 其お金でこ  
んどわ二足分の革を買つて來まして、其晩になつて  
から また明日の用意にと思つて截つて置いて 伏  
床え 這入りました。

所が 明朝になつて 起きて見ると 又チャンと

靴が二足出来て居る。これわ妙だと思——うちに  
 た買人が二人やって来て こんどわ 四足分の革が  
 買える丈のお金で 其靴を買って行きました。

それで、こんど四足丈出来る様にして置くと 明  
 朝になつてまた チャンと 出来て居る、するとす  
 ぐにまた買人が来るとゆ——様な具合で 毎日々々續  
 きましたから そ——して居る中に半太わ 又も  
 との通りの 金持になつたのです。

ある晩のことでしたか も——正月に間もないと云  
 一時間でした。半太わ 何時もの様に 革を截つて



置きました。さーこれから休もーとゆー時お内儀さんにはーますますにわ「どーだね 一體不思議でならないじゃないか。こーやって毎晩靴を拵える用意をして置くと チャーンと 明朝になつて 出來て居るから妙じゃないか まーお蔭で こーして商賣も繁昌して來て 有難いこつたが 全體誰だろーこんな毎晩來て 働いてくれるのわ」するとお内儀さん「そーですよ ほんとーに 私も不思議でならないの。どーでしよー 今夜わ 二人で起きて居て誰だか 見届よーじやありませんか」「そーそれが

宜よかるー』と申まうすので 二人ふたりわ 室むろの隅すみに隠かくれて居ゐ
 ってだんくくと 夜よの更よけるのを待まちつて居ゐます。
 ぞーこーしてる中うちに 近きん所じよの人ひとも 皆みな寝ねて仕し舞まつ
 て 夜よがだんくく更よけて來きますと、あたりがシ
 ーンとして 只ただ柱はしら時ど計けいのチツくとゆー音おとが 急きんに
 耳みみに立たつてきました さー もー出でて來くる時じ分ぶんだな
 と 思おもつて 二ふた人たりわ 息いきを殺ころして 隠かくれて見みています
 と これわ不ふ思し議ぎ！ どこからとなく 二ふた人たりの誠まことに
 小ちひな人ひと間げんが ふいと出でて來きたのです。 それわ 小ちひい
 と 言いつたら 皆みなさんの手ての掌ひらにでも 座くられそーなほ

どなのです。「おや  
つ」と思おもって見みて

居いますと 此この二ふ人たり

の 小こ人びわ チヤン

と 仕し事ごと場ばえ 座まって

例れいの 革なかしがを 取とるとす

ぐ さー 糸いとで 縫ぬい

やら 槌つちで 打うつやら

夫さいわ く 小こな 指ゆび

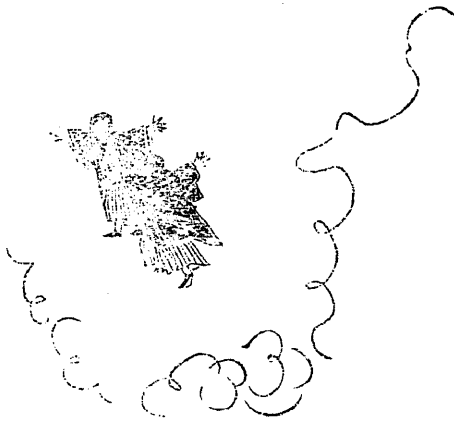
先まで ま こと に 手て 早はやく 仕し事ごとを しまして 一い時じ間かんも 經た





たと 思<sup>おも</sup>いと もーチャンと靴<sup>くつ</sup>が 出<sup>で</sup>來<sup>き</sup>ました。  
すると二人<sup>ふたり</sup>の小人<sup>こびこ</sup>わ どこともなく ふいと 飛<sup>と</sup>ん  
で 行<sup>い</sup>きました。

「おやまー 小人<sup>こびこ</sup>でしたよ 二人<sup>ふたり</sup>を お金持<sup>かねもち</sup>にしてく  
れたのわ ねーあなた 何<sup>なに</sup>か 御禮<sup>おれい</sup>  
をしなければなりません。おー  
そーく あんなに 飛<sup>と</sup>び 歩<sup>あ</sup>いてわ  
居<sup>か</sup>るものゝ あの人<sup>ふたり</sup>わ まー 裸<sup>はだ</sup>  
體<sup>だ</sup>ですもの こんなに 風<sup>かぜ</sup>の 吹<sup>ふ</sup>く 晚<sup>ばん</sup>  
などわ どんなに 寒<sup>さむ</sup>いでしょー な



んなら小さな衣服きふくや 羽織袴はせきばかまや、足袋たびを拵こしらえて上げ  
 たらどーでしよーねー」お内儀うちぎさんわ いー人です  
 から 半太はんたに相談さうだんしますと 半太はんたも「それがよかるー」  
 と云いーので 明日あしたになつて お内儀うちぎさんわ 急きんに拵こしら  
 え出して 其晩方そのばんがた いつもの革かわの代かわりに 仕事場しごとばえ持も  
 て行いつて そーつと置おいといてやつて 又またかくれて  
 見て居かました。すると眞夜中まよなかになつてから また例れい  
 の様ように 二人ふたりの小人こびこはどこからとなく飛とんで來きまし  
 た それで「仕事しごとにかゝろー」と思おもつて見みますと革かわがな  
 いもんですから 不思議ふしぎに思おもつたのか 二人ふたりわ 小ち

さな顔を見合せて居ましたが、やがてそこに置いてくれた小さな衣服を見て、すぐ取って着て見せてキヤツク云って喜んで互に見較べたり引張合ったり何かして騒いであっちこっち飛び廻って居ました。がとーく戸口の外え飛んで行きました。夫から小人はもー來ませなんだのですが靴屋の半太わ其後だんくと儲かって終にわ大變な大金持になりましたとさ。